

研究課題（テーマ）	40 歳以上の高年初産婦が新生児訪問時に求めていることと看護職の捉え方からみた支援の検討		
研究者	所属学科等	職	氏 名
代表者	看護学部看護学科	助教	三加 るり子
分担者	金沢大学 金沢大学	教授 准教授	表 志津子 岡本 理恵
研究結果の概要			
今年度は、研究計画立案から研究協力施設の選定、国内外の動向を把握するための文献収集、対象者理解のための知識習得を行った。 先行文献より、40 歳以上の高年初産婦は、30 代と比較し妊娠前からの基礎疾患有病率が高く（Luke,2007）、妊娠期・分娩期のリスクがより高く産褥期にも影響が及ぶ（植木,2020）という特徴が明確になった。また、精神面においては、自分なりの確立した考えから、心身ともに育児に適応しにくいことや SOS を出しにくく家族のサポート状況からも社会的に孤立する傾向がある（三加,2022）一方で、豊富な経験知、児への深い愛情と思考の柔軟性、自己管理能力、高い子育て潜在能力がある（Sakajo,2014）という強みも分かった。 また、看護職による生後 28 日未満の新生児家庭訪問は、自宅で生活する母子にとって地域の看護職と密接に繋がる初めての機会であり、新生児訪問で訪れる看護職は地域におけるキーパーソンとなる重要な存在である。諸外国においても、高年初産婦に対する支援や地域連携促進における地域で活動する看護職の重要性（Carolan,2004）や産後早期の家庭訪問への母親のニーズが高い（Khang, 2022）との報告がある。 これらの 40 歳以上の高年初産婦の特徴および新生児訪問の重要性を踏まえ、対象者がどのようなことを求めているのか等、新生児訪問の実際について今後も調査を継続していく。			
今後の展開			
今後は、研究対象として選定され同意を得た研究対象者に調査を行う。調査結果を分析し、その結果から、看護職が新生児訪問において母親と子どものニーズに合致した適切な支援につなげることができることを期待できる。本研究結果は国際学会にて発表予定である。			